

# 高山

たかやま  
高山の原生林を守る会

会報 第 111 号

2019年 12月



## 第 167 回自然観察会:城山・里山陽だまり観察会

11月24日に大森城址公園で観察会を行いました。参加者は10名でした。大森城址公園は信夫山公園に並ぶ福島市内の桜見の名所です。大森城址には散策路が設けられています。その散策路は地元の「大森城山を愛する会」の方々が定期的に刈り払いをして整備されています。今回も、刈り払いを終えたばかりでしたので、生憎の雨でしたが、心地よく観察ができました。下見の時も含めて、この季節に城山を訪れる人は少なかったですが、賑わいの有無にかかわらず城山を愛する地元の方々による日常的な散策路の手入れによって、貴重な城山の自然と歴史遺産が保護されていると思いました。

散策路は住宅地の水路にかけられた石造りのアーチ型の小橋が入り口になります。この小橋はなんと宝暦2年(1752年)に作られた歴史遺産です。散策路は城山観音堂までの参道になります。道すがら、東北では珍しいヤブガラシの果実や春菊の味がするベニバナボロギクなど、今までの観察会では見たことがなかった人里の植物を観察できました。

尾根に出ると遊具などが整備された公園になりますが、裏側の平坦地にはエノキ、クマノミズキ、ウワミズザクラなどのミニ森林が残されていました。それぞれの樹形が面白く、ビジュアルツリーウォッチングを楽しみました。またクマノミズキの根株を覆うように生育するクサゴケの密生する胞子体の蒴に雨傘がとまり、そのミクロの美しい世界は格別でした。コケ女と化した参加者の一心不乱に撮影する姿に感嘆しました。晩秋はコケの「花」の季節でした。日頃、訪れることのない城山でしたが移設された古墳など貴重な歴史遺産やヤマグワ、クマノミズキ、エノキ等の城山特有の樹木など発見の多い観察会でした。



エノキとクマノミズキ



ミニ森林のツリーウォッチング



## 第 166 回芋煮会と霊山観察会に参加して 安彦隆志



霊山城址にて

秋を感じるため、観察会に参加させて頂きました。期待したほどの紅葉を見ることが出来なかったことが、とても残念です。しかしながら、つた漆の赤には感動しましたし、山でなければ見ることの出来ない秋の気配を十分感じることが出来ました。カメムシの姿を見て、童心に戻れたことも最高です。

今回、私が一番感激したのは、手際よい芋煮会の準備と美味しい料理です。山形・福島の芋煮会の具材、味付けにこれほどの違いがあるとは知りませんでした。(主催者の主旨と異なる感動で申し訳ありません。)皆様の話を基に、クック・パッドで調べて知りました。

それにしても、講師を始めとして皆様の知識、好奇心には驚いてしまいました。草木に限らず、カメムシや苔にまで興味を示され、「苔女」なる新ワードまで教えて頂きました。ウインドウ・ショッピングが出来ない私は、周囲に目を配ることが出来ず、ただ前を向いて歩くだけでした。なぜ横を向けないかという、それは横を見ても、それが何たるかがわからないからです。今回反省しなければならないことは、事前学習を怠っていたということです。ある程度の知識があれば、もっと楽しむことが出来たはずです。もし、次回参加する機会があれば、芋煮会のみに参加するか、予習してから参加したいと思います。今回はたいへんお世話になりました。



芋煮の味付けは 2 種類



コソボゴケの雄器盤



エサキモンキツノカメムシ

## 冬の要諦は乾き対策～季節と体 4～

土井 昇

冬に入り鼻水が出たり眼がショボショボしたりするのは乾きのサイン。粘膜は冷えと渴きのダブルパンチでダウン。その状態を回避するため鼻粘膜を湿らせているのが、急激な温度変化や風によりくしゃみになる。眼は本来糊のような場所で乾いてはいけない。表層粘膜の水分を一時的に補うなら洗顔もよいが、眼を温める(蒸しタオルがよい)ことで身体全体が潤う効果があり、更に乾きが進んでいる人は、鎖骨の上の窪み(左右ある)を温めるとよい。その時、胸椎の3, 4番を同時に愉気すれば水分の回復を促す効果がある。

冬の焦点はとにかく眼なのだが、耳殻の柔らかさは骨盤部にも及んでいく。年を取って耳が遠くなるのも、骨盤がしまらず、後方に回旋して下がるのも腎臓とつながる変化だが、加齢に対するソフトランディングにもなる。冷えと乾きによって枯渇してくる身体の動きが悪くなるし、気がめぐらない。室内の温風暖房なども乾きを助長する。正面から受けてはならない。水を摂る時はチビチビ飲みがよく、沁みるようになめる。本格的な冬になれば多めに飲んでよい。寒の水は身体を締め、しっかりしまった身体は温かくさえある。

運動器系の活動が少なくなり、神経系の活動が中心になる季節。その代表でもある眼の手入れを習慣づけることで乾きを防ぎ水分を回し、潤いのある身体で春を迎えよう。

注: 眼の温法は、緑内障、毛網疾患、感染症の人は禁忌。掌を眼の上に触れるのは可。

高山の原生林を守る会 2019 年定期総会報告

日時:2019 年 11 月 24 日(日) 午後 13:00~16:00

会場:もりの保育園

月 日	内 容	参加人数
11月23日(日)	第161回十万劫自然林陽だまり観察会と総会	16名
12月2日(日)	2018年度NF米沢講演と活動報告会	1名
2月1日(金)	置賜森林管理署西大巔登山道保全に関する申し入れ	4名
2月15日(金)	会津森林管理署西大巔登山道保全に関する申し入れ	4名
2月22日(金)	吾妻山周辺森林生態系保護地域の保全管理に関する検討会	2名
2月24日(日)	第162回達沢不動滝周辺自然林雪上観察会	21名
3月18日(月)	信夫山再生計画を考える集い	4名
4月14日(日)	第163回 茶屋沼・茶臼森スプリングエフェメラル観察会	21名
4月25日(木)	東北環境事務所西大巔登山道保全に関する申し入れ	3名
5月15日(水)	信夫山再生計画を考える集い	4名
5月19日(日)	花塚山登山道放射線量調査	3名
6月2日(日)	第164回土湯峠・新緑のブナ林と湿原植物観察会	22名
6月14日(金)	西吾妻登山道誘導ロープ設置ボランティア	2名
6月23日(日)	西吾妻登山道誘導ロープ設置ボランティア(NF米沢と共同)	4名
6月30日(日)	信夫山観察会	16名
9月8日(日)	第165回講演会と新地町埴浜防災緑地湿地観察会	15名
10月6日(日)	霊山空間線量調査(学習院大学・大野剛博士同行)	7名
10月10日(木)	信夫山憲章に関する懇談会	1名
10月20日(土)	西吾妻登山道誘導ロープ取り下げボランティア	6名
10月27日(日)	第166回 霊山自然林観察会と芋煮会	18名
11月24日(日)	第167回大森城山自然林陽だまり観察会と総会	10名

2019年 高山の原生林を守る会 会計報告

収入 (単位 円)			支出 (単位 円)		
科目	決算額	摘要	科目	決算額	摘要
前期繰越金	115,516		会議費	720	新地町改善センター使用料
年会費	35,000	1000円×35名(会員数62名)	郵送費	14,114	会報(No 107~No 110)
観察会参加費	62,500	500円×125名(観察会 7回)	観察会経費	3,953	芋煮会材料費
保険金繰入金	8,309	前払い金と実績申告の差額	交通費	38,730	観察会車代、ゴンドラ代等
寄付金	40,000	匿名団体より	保険代	38,796	三井住友海上火災(含手数料)
その他	200	信夫山観察会 資料代	HP利用料	4,428	HPプロバイダー料(含手数料)
合計	261,525		雑費	5,658	西吾妻ロープ設置備品(かけや)
			予備費	18,219	会報インク代、供花代
			合計	124,618	

収入 261,525 円  
 支出 124,618 円  
 差引残高 136,907 円

収支差引残金 136,907円は次年に繰り越すものとする。

2019年11月24日

2020年活動計画

- 事業の3本柱である観察会、登山道保全活動、阿武隈山地の放射線量調査を実施します。
- 会費未納会員解消を図ります。
- 西大巔登山道保全に関する関係機関への申し入れを継続していきます。
- 信夫山再生計画や山岳の太陽光発電設置計画について、自然保護の立場から、会員への情報発信に努めます。

自然観察会について

観察会の安全性と内容の一層の充実化を図るため、以下の観点から集合時間を見直し、8:00~9:30とします。また、終了時間は15:00~16:00とします。具体的には季節と観察会の場所を考慮して決定します。

1. 遠距離からでも往復に無理なく参加できる時間帯とする(遠距離参加者の安全性の担保)。
2. 観察会の行動時間は、歩き始めから6時間を目安とする(疲労による行動中の事故の回避)。
3. 主婦が参加しやすい環境を整える(観察会後の休息と家事準備のための時間確保)。

ネイチャーフロント米沢 2019 年活動報告会

日時:2020年1月26日(日) 14:00~16:00 会場:米沢市西部コミュニティセンター大会議室

講演「蔵王山アオモリトドマツ林の虫害対策取り組み状況」-蔵王の樹氷 減少対策の取り組み-

講師 船津浩章 山形森林管理署地域林政調査官

申込・問合せ:ネイチャーフロント米沢事務局 森 0238-43-6166(18時~20時)または高山の原生林を守る会 佐藤守(024-593-0188, florpomofores2105-1804@coral.plala.or.jp)へ



ここは南八ヶ岳連峰稜線上の地蔵の頭、顔を上げればすぐそこに主峰赤岳の頂上が見える。突然Aが「オイここで泊まろう」と言いだした。きのう本沢温泉でテントを張り、標高二千メートルの野天風呂で満天の星を眺めながら浸かった温泉に、今朝もまた入ってしまったのが失敗だった。温泉でなまってしまった身体で夏沢峠へ登り、硫黄岳の爆裂火口を望みながら横岳へと縦走してきたが、遂にここでギブアップ。計画ではここから赤岳に登り、今日中に美しの森まで下るはずだったが、この調子では明るいうちには着けそうもない。

同級生のAから「八ヶ岳に行かないか」と誘われた。八ヶ岳は前から登って見たかった山だ、それじゃあ行ってみるか簡単な気持ちで承諾した。

「俺もこれ以上歩くのが嫌になった、チョット早いけど赤岳の頂上小屋に入ろう」と言う。「そりゃダメだ。金が勿体ない、今夜はここでビバークまあ平たく言えば野宿だ」「野宿するって、ここは国定公園、テント張ったら捕まるぞ」と言う。「暗くなったらシュラフにくるまって寝る」とAはもう決心したという顔で言った。(その時のふたりの頭の中には赤岳に登らず、このまま下るといった選択肢は全くなかった)それから何故かAが急に強気になり、リーダーシップをとるようになって「お前はこれから行者小屋へ下って、水筒に水を汲んで来い」と命令口調で言った。「なんで俺が行くんだ」と反論すると、「おれはワングル部、お前は山岳部、山ではお前がやっぱり頑張らねば」と訳の分からない理屈を捏ねて平然としている。地図の行程表を見ると、地蔵の頭から行者小屋まで往復2時間半。「まあ仕方ない。行ってくるか」とサブザックに空の水筒ふたつを入れて、行者小屋まで水の調達に出発した。

地蔵尾根はクサリ場やハシゴ等が設置された岩場と、ガレ場が続いたが、空身の身には難なく順調に下ることができた。小屋には多くの登山者がいて、その中の女子大生風のお姉さん登山者に水場の場所を聞き、少し恥ずかし気にその水はタダなのか尋ねると、お姉さんはニコッとしながら「ええ、無料ですよ」と教えてくれた。そこで安心して水筒に水を満たすとすぐに、今度は下ってきたばかりの道を登り返し、どうやら日が暮れる前に野宿の準備をしていたAと落ち合うことができた。人は恐怖心よりも使命感のほうが勝らしい。ひとり下って登った誰もいないクサリ場やハシゴに不思議と恐怖心は起こらなかった。

その夜の食事は、即席ラーメンと魚の缶詰、デザートに豪華桃の缶詰を二人で分け合い食してから、辺りに人がいなくなるのを待って、登山道の外れにある大きな岩とハイマツとに挟まれた、窮屈だがふたりが寝られるだけの広さの平らな場所に移動した。山小屋から見つけてはまずい。懐中電灯は使わずに星明りの下でセーターを着てから、新聞紙で内張をしたシュラフの中にもぐり込み、シュラフごと足をザックに突っ込んで、お互いの頭と足の向きを逆にして、テントのグランドシートにくるまって寝た。シュラフに入ってからどの位の時が過ぎたのか、Aが「オイ生きてるか。寒くないか」と声をかけてきた。「ア〜寒くない、星が空一面びっしりできれいだぞ。二千七百メートルからの大宇宙だ」「街の灯りもきれいに光っている。あそこは小沢(?)かなあ」「明日は暗いうちにここを出て、赤岳の頂上で御来光を見よう」と告げて、それから私はこの環境では眠られるわけがない。どうせこのまま悶々として一夜を過ごし、夜明け前に頂上へ向かうことになるのだろうと覚悟して沈黙した。

朦朧とした頭の中にカ〜ンカ〜ンという鐘の音が響いた。自分はウツラウツラと寝とぼけているのだと自覚しながら、どこかに陽射しを感じて目を擦ってみると、朝日が赤岳の頂を赤く照らしている。シマッタ寝てしまった。太陽はもうとっくに昇っている。あの鐘の音は山小屋からだ、小屋の前で数人の人たちがこちらを眺めている。私はAに「ヤバイ



赤岳遠望



硫黄岳から横岳



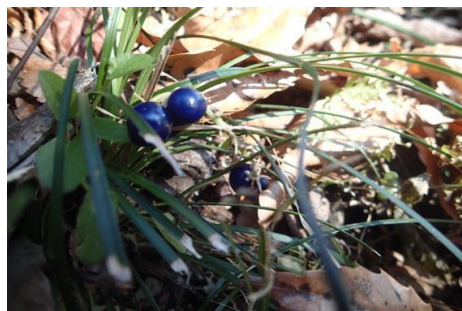
赤岳道標

起きろ。みんなが見ているぞ。バレたみたいだ」と言うと、彼はムククリ起きだし、黙って黙々と寢床の撤収を開始した。捕まれば怒られるのか、憐れまれるのか、笑われるのか、我々高校生には見当もつかなかったが、その時はその場から一刻も早く逃げ出すことしか考えなかった。急いでリュックを背負うと、鐘の山小屋を大きく迂回する道を辿り、赤岳の頂上に立ち、何事もなかったような顔をして美しの森まで下って、そこにいた多くの避暑客たちに紛れて山行を終えた。今思えばビクビクしながら赤岳の頂上へ登り、ビクビクしながら麓へ下ったふたりの少年は、結構幼稚で純情な高校生たちだった。今は昔、五十三年前の懐かしい八ヶ岳の思い出として、私の心に残っている。

## 鹿狼山から50 ～小春日和に～ 小幡 仁子

小春日和の日々が続いている。家の中は肌寒いが、外に出ると陽がまぶしいくらい注いで暖かい。今日も鹿狼山に行こうかと思う。

今、我が家の軒先には干し柿が20個ほど下がっている。陽を浴びながらほおぼっていると、生きていくことの幸せを感じる。実にいい気分だ。私の父も干し柿が好きで、軒先に干し柿がぶら下がっているのは「福しい気がする」と言う。戦争を経験し、食料や物のない時代に育っているから、干し柿は冬のご馳走だったのだろう。



ジャノヒゲの碧い実

あれ、何だ！庭のサザンカに見たことのない小鳥がガサゴソしていると思ったら、目の周りの白い輪っかが見えた。メジロじゃないか？わ～すごい！サザンカの蜜を吸いに来たんだ、と気が付いた。今年、我が家のサザンカはどうしたのかな？と思うくらいに花芽をつけて、花がベタベタ咲いている。メジロも美味しいのがあると気が付いたのか、それにしてもちょこまかと忙しい動きをするものだ。花の中に、ストローのようなくちばしをチョチョッと入れるのは見えたが、すぐに飛び去ってしまった。2羽のつがいだった。メジロを見たら、ちょっとご褒美をもらった気分になった。

鹿狼山に行く前に、ミズアオイの咲く田んぼに寄ってみた。ミズアオイが咲くのはこの田んぼの端っこで、いつもぬかるんでいる場所である。ここは、機械を入れるのも嫌なのか、イネを刈り残したような状態だ。ミズアオイは枯れてはいたが、茎もしっかり残っていて、来年もまた咲きそうであった。多分、いつも地面から水がしみ出ている、除草剤が効かない場所なのだろう。環境が合えばすぐに芽を出してくる。植物の種子の強さをすごいと思う。

埼玉防災緑地湿地のミズアオイも枯れてはいたが、また来年も咲くだろう。あの場所も除草剤を入れたりすることはないから、多分、株を増やして咲くと思われる。現在も湿地の中央部分は水が溜まっていて、ミズアオイが咲くには充分な環境が備わっている。来年が楽しみである。

さて、鹿狼山は、平日でも午前中は駐車スペースがない。若い人はさすがにあまりいないようだが、中高年の中にも早足で駆け登る人もいる。一人で歩く女性や、グループ登山、目的は様々だ。私は、今日は何か新しい発見があるかなと、あちこち見ながら登っている。今日の発見は、ジャノヒゲの碧い実である。鹿狼山にオオバジャノヒゲがあるのは分かっていたが、ジャノヒゲには気が付かなかった。オオバジャノヒゲの花は7月ごろ、甘くて良い香りを放ちながら、鹿狼山に群生している。花は総状に付き、薄いピンク色でなかなかかわいらしい。果実は黒っぽい深緑色で、登山道脇でも結構目にする。



田んぼのミズアオイ

今日は初めてジャノヒゲの碧い実を見て、鹿狼山にジャノヒゲもあったのか。それにしても、今までジャノヒゲの花に気が付かなかったし、どんな花かも知らないなどと思った。家に帰ってから図鑑を開いた。気が付かなかったのは花茎が短くて、葉っぱの中に埋もれてしまい、見えにくいからのようである。来年は花を見てみようと思う。(2019/12/20 記)





# 東北ブナ紀行（71）

奥田 博

今回はマイナーな山と有名な山の紹介です。ハッ楯山は月山の南にあり、尾根続きの最後の高みともいえそうな山。御所山は山形県での呼称で、一般的には船形山と呼ばれ、ブナ原生林と大伐採の山として有名。山形県のブナを紹介して来ましたが今回は最後で、次回から宮城県に移りたいと思います。

## 107)ハッ楯山 1009m

この山には登山道は無い。山頂から北に伸びる尾根をたどれば、月山山頂から本道寺へと下る登山道に合流する。そんな位置にあるので、月山の匂い漂う山でもある。

国道112号線の寒河江ダム脇駐車場から歩き出す。杉植林の管理道を登り始める。どこまでも道を追わずに、杉林の中を地図の平坦地を目指して方向を西に変える。

西の尾根に上がろうとイヤなトラバースをやり過ぎると、狭いが若いブナ林の尾根に出る。登りに連れて広い尾根となって、下りが楽しみだ。広い815m点を見ながら、尾根に上がるとブナの疎林となり、東側の展望が広がる。ここからは広々感のある尾根を進む。ブナは西側の尾根に見える。広大な斜面には、疎らにダケカンバが広がっているの、伐採地だろうか？その間に伐採を免れた大ブナが点在している。広い斜面を抜けると、山頂が見えてきた。山頂からは月山と朝日連峰が意外に近くに見える。標高千メートルとは思えない雄大な景色だった

コースタイム:登山口(1時間40分)815尾根(50分)山頂(1時間15分)登山口



山頂付近に散見されるブナは立派（ハッ楯山）



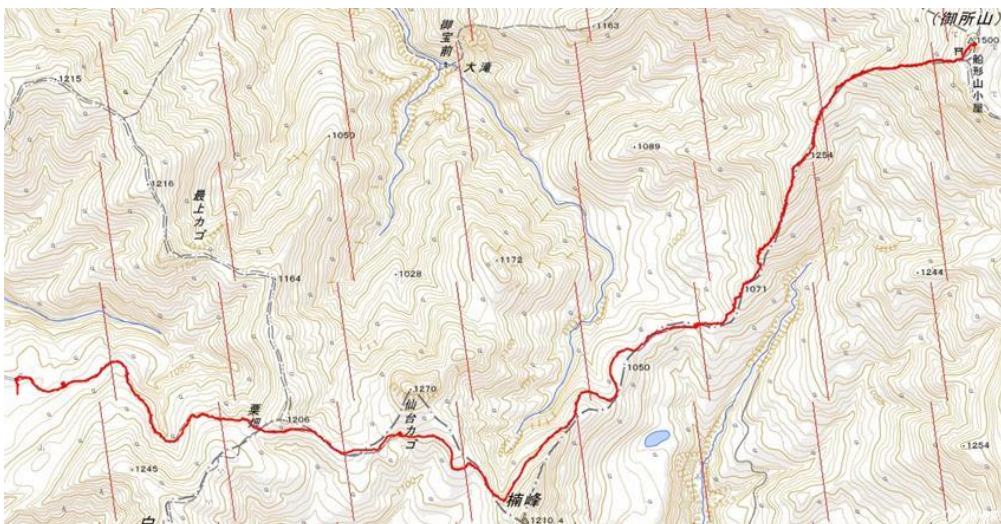
## 108)御所山(船形山)1500m

登山口は既に標高1000m、山頂は1500mだから標高差500mと思いきや、途中から標高を下げ、さらに往復12kmを超えるので、意外に手強い。しかし山頂手前を除いて、道中はブナの森歩きに終始する。こんなに長いブナ街道を持つ山は、少ないだけにブナ好きにはお勧めのコース。

登山口から後白髪分岐までが第Iフェーズ。登山口からイキナリ立派なブナが現れて感動する。後半、栗畑と呼ばれる峠の前に現れる若い二次林のブナが、素晴らしい「未来の森」。第IIフェーズは、仙台カゴから最低鞍部・小屋跡まで、



登山口から始まるブナの森の純度は高い（御所山）



古い時代から変わってなかったような、ブナの道が続く。第IIIフェーズは、そこから標高1254m点まで、垂直分布が感じられるが、面白い形をしたブナが多い。その上は次第に矮小化して、山頂の草原地帯へと続く。

コースタイム:登山口(60分)仙台カゴ水場(50分)最低コル・小屋跡(2時間)山頂(3時間30分)登山口



## タカネアオヤギソウ (*Veratrum maackii* var. *parviflorum* f. *alpinum* シュロソウ科シュロソウ属)

吾妻連峰・亜高山帯のチシマザサ草原や、やや水はけの良い砂礫地に植生する多年草。アオヤギソウの高山型の品種。別名クモイアオヤギソウ。母種のアオヤギソウはクリ・コナラ林からブナ林にかけてのやや湿った林内に植生する。アオヤギソウは安達太良山域のブナ林帯でも度々見かけるが、タカネアオヤギソウは、吾妻連峰の一部の山域でしか確認できていない。近縁種にタカネシュロソウがある。花被片色が、黄緑色がアオヤギソウ、赤紫系がシュロソウに分類されている。しかし、アオヤギソウの花被片色の変化には紫から緑まで連続性がある。アルカロイド類のジェルビンを含む有毒植物である。

葉は互生。根生葉のみで、両側から花茎を包むように着生する。葉形は長楕円形から広卵披針形で変異が大きい、葉面には平行脈が走り、縦に波打つ。

花は頂生、茎の上部に複総状花序を着生する。花序の苞は披針形である。小花はユリ科の花と同様に3数性を示し、花被片、雄しべ数は6。花色は黄緑色で花被片の周辺は暗茶褐色に縁どられる。また花被片中央部も暗紫褐色を帯び、梅の花のような形状を示す。葯の色は黄橙色。雌しべの柱頭は白色で成熟すると3裂する。花被片各部の色合いは個体により変化し、花の外観は万華鏡のようである。東北地方では最下部の花序の長さとその基部の苞の長さの関係でアオヤギソウとタカネアオヤギソウの識別が可能で、タカネアオヤギソウは苞の方が長い。また、両種の垂直方向の植生域はブナ帯を挟んで明らかに乖離している。

何度も出会いながら見過ごしていた美しさに、突然気づくことがある。タカネアオヤギソウもそんな花である。高山山麓を散策していたある日、垂直に連なる小花を咲かせた1株のアオヤギソウに遭遇した。その端正な立ち姿と濃緑の小花の色合いに魅せられてしまった。その後、タカネアオヤギソウの多様な花被の彩色模様気づいた。内側の花模様はカタクリのハニートラップ同様に神秘性を感じさせる。植生地により花の様相が異なるようなのでタカネアオヤギソウを鑑賞する山行脚を試みようかと思う。



## ミヤマコウゾリナ (*Hieracium japonicum* キク科ヤナギタンポポ属)

吾妻連峰の草地に沿った砂礫地に植生する多年草。日本固有種。低地に植生するコウゾリナ(コウゾリナ属)とは属が異なる。コウゾリナの高山型はカンチコウゾリナ(タカネコウゾリナ)である。カンチコウゾリナは吾妻・安達太良連峰には植生していない。また、ミヤマコウゾリナは吾妻連峰の一部の山域でしか確認できていない。ニガナとコウゾリナは「ミヤマ」と「タカネ」を冠した植物があり、なかなかややこしい。ニガナに比べればコウゾリナの方が分かりやすいかも知れない。

葉は互生。根生葉と茎葉を着生する。根生葉が発達し、茎葉は少ない。葉形は倒披針形から長楕円形で葉縁は全縁で鋸歯はない。カンチコウゾリナの葉には鋸歯がある。葉の両面と花茎には褐色の剛毛と白い腺毛がある。コウゾリナは剃刀菜で剛毛に由来する。

花は頂生。根生葉から伸びた花茎は、頂部で分岐しその先に頭花を1個着生する。頭花は5枚の花弁が合着した舌状花のみで、筒状花はない。舌状花はほとんど直立して平開しない。雄しべは5本。葯が合着し、花柱を囲む。雌しべの柱頭は2つに分岐する。総苞は黒みを帯び、褐色の長毛と白色の短毛を密生する。

ミヤマコウゾリナは白い花茎と黒い総苞のコントラストが印象的。真夏の飯豊山に登ると乾いた登山道の所々で群落が見られる。吾妻山域ではおなじみとはいえないのだが、リンネソウを訪ねた際に、やはり乾いた斜面に咲き始めた数株に出会った。最近飯豊山に登っていないので久しぶりのご対面である。実は、白山で似た植物に出会っていたのだがこちらはカンチコウゾリナであった。コウゾリナは夏の埴浜防災緑地湿地でお目にかかっていた。



## 2020年自然観察会計画

回数	月日	曜日	候補地	テーマ	集合時間	解散時間	担当者
第168回	2/24	(月・祝)	仁田沼雪上観察会 四季の里正面入り口(あづま橋側)	雪上観察 (冬芽とフィールドサイン)	9:00	15:00	佐藤 守
第169回	4/12	(日)	小鳥の森春の息吹観察会 小鳥の森駐車場	スプリングエフェメラル観察	9:00	15:00	小幡仁子
第170回	5/3	(日)	石田ブヨメキ湿原の植物観察会 小鳥の森駐車場	早春の植物観察	9:00	15:00	奥田 博
第171回	7/5	(日)	姥ヶ原の高原植物観察会 四季の里正面入り口(あづま橋側)	夏の高山植物観察	8:00	16:00	青柳静子
第172回	10/4	(日)	半田山紅葉観察と芋煮会 小鳥の森駐車場	紅葉観察と芋煮会	8:30	16:30	佐藤清子
第173回	11/23	(月・祝)	信夫山自然林陽だまり観察会 信夫山公園	里山の陽だまり観察	9:00	12:00	渡邊アヤ子
総会			会場 福島市働く婦人の家		13:00	16:00	

### 山形と共同の西吾妻の登山道保全ボランティア

月日	曜日	山域	作業内容	備考
6月13日	(土)	西大巓	誘導ロープ設置	NF米沢との共同開催
6月14日	(日)	(予備日)		● ロープ設置作業は従来通り、デコ平湿原からとします。
10月17日	(土)	西大巓	誘導ロープ取下	● ロープ取り下げ作業はゴンドラを利用します。ゴンドラ代は全額参加者負担とします。
10月18日	(日)	(予備日)		● ロープ設置作業の一般公募を継続します。

### 第168回自然観察会案内：仁田沼雪上観察会

日時：2020年2月24日(月)9:00～15:00

集合場所 四季の里正面入り口(あづま橋側) 集合時間 9:00 参加定員 20名

内容 仁田沼周辺の冬の湖沼林を散策し、フィールドサイン、冬芽等の春を待つ森の表情を観察します。

準備するもの 昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、帽子、手袋(軍手複数)、着替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳、冬季歩行用具(スノーシュー、カンジキ、スキー)

\* 装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費用:保険代(500円)、申し込み:2月22日(土)まで佐藤守(024-593-0188)へ電話またはメールにてお願いします(電話申込は午後7時～9時でお願いします)。

### 2019年カタクリの会奥羽自然観察会計画

月日(曜日)	回数	自然観察会のテーマ	観察地(集合時間・場所)
1/19	日	349	冬の廻戸小屋 廻戸(10時:湯夢プラザ)
2/16	日	350	雪の自然観察 雪国文化研究所(10時)
3/15	日	351	春を見つけよう 越中畑・峠山(9時:湯夢プラザ)
4/26	日	352	カタクリの里歩き 七内・蛭山(9時:湯夢プラザ) 30周年記念宿泊交流会
5/17	日	353	雪椿と夏の渡り鳥 白木峠(9時:湯夢プラザ)
6/14	日	354	新緑のブナの森 星めぐりの森(9時:湯夢プラザ)
7/19	日	355	川歩き 廻戸(9時:湯夢プラザ)
8/23	日	356	ブナ森の滝めぐり 下前風景林(9時:湯夢プラザ)
9/20	日	357	木の実とキノコ 未来の森(9時:湯夢プラザ)
10/18	日	358	落葉と紅葉 ブナ指標林(9時:湯夢プラザ)
11/1	日	359	冬の渡り鳥 錦秋湖周辺(9時:湯夢プラザ)
12/6	日	360	初冬の森 湯川温泉周辺(9時30分:湯川温泉鳳鳴館)

- カタクリの会は西和賀町での自然観察会開催を目的とした会です。
- 誰でも自由に参加できますが、各観察会の1ヶ月前から電話でのみ受付です。通常参加費は500円
- カタクリ通信を偶数月に発行しており、希望者には年間千円で送付します。  
(郵便振込みをご利用ください:  
02350-5-38765 加人者名:  
カタクリの会)
- 連絡先:〒029-5512  
和賀郡西和賀町川尻 41-72-15  
電話&FAX0197(82)3601  
email:tsuyosi.segawa1954@gmail.com  
代表:瀬川強

振込による会費の納入は、郵便振替02170-0-24351「高山の原生林を守る会」へ

「高山」高山の原生林を守る会会報 第111号 2019年12月発行

編集・発行：高山の原生林を守る会 HP:<http://www15.plala.or.jp/adumatakayama/index.htm>

代表連絡先：佐藤 守 Phone 024-593-0188(夜間7時～9時)

郵便振替：02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」

入会方法：年会費(1000円)を添えて上記まで

編集：佐藤・奥田・小幡